

# The study of teaching materials for Chinese poetry: Reading deeply Wang Wei 'The farewell'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: HARADA, Ai メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00058243">https://doi.org/10.24517/00058243</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 漢詩教材研究 —王維「送別」を読み解く—

原田 愛

The study of teaching materials for Chinese poetry :  
Reading deeply Wang Wei 'The farewell'

Ai HARADA

### はじめに

中等教育の国語科漢文教材は唐代の名詩が多く採用され、また、今は日本の漢詩もしばしば取り上げられている。その際、漢詩の①白文（漢字のみ使った原文）に②訓点（返り点などの符号や送り仮名、句読点）が字間や行の脇に小書きで書かれており、概ねそれに沿つて③訓読（書き下し）を行い、④語句や語法を学んで読解し翻訳することになっているが、国語科の教材としては、④の説解・翻訳が読解力・表現力の向上において重要である。

以前、李白「山中問答」を教材として取りあげ、知識や説解力、表現力等の向上に繋がる授業の方法として次の方法を考えた。

- (A) 詩の語句や平仄・押韻・拼音を漢和辞典で調べ、現代中国語で音読し、リズムや響きとともに内容構成を理解する
- (B) 文人の翻訳を鑑賞する、英訳による説解と表現
- (C) 文人の翻訳を鑑賞する、日本の文人による説解と表現
- (D) 詩の「典拠」を読み、説解に深みを持たせる

今回、同じく盛唐の詩人である王維の「送別」を教材として、以上の四つの方法も踏まえつつ、更に新たな授業の展開を考えたい。

### 1. 王維「送別」について

王維（六九九～七六一、字は摩詰）の「送別」は、教科書における採用は少ないものの、王維の詩の中でも屈指の名詩として名高く、『唐詩選』にも採られている。まず、(A)詩の語句や平仄・押韻・拼音を漢和辞典で調べ、現代中国語で音読し、リズムや響きとともに内容構成を理解する方法によって、詩を読んでみたい。王維「送別」は平仄かる「五言古詩」に分類される。また、脚韻でみると、「之(zhi)」「陲(chui)」「時(shi)」を確認して中国語で読んでみることで、全体のリズムと押韻の効果を聴覚で感じ取ることが可能である。また、実は訓読・翻訳については、幾つかの説がある。前野直彬氏が『唐詩選（上）』の「送別」の語注において、わかりやすく詳細に説解しているので引用する。

(盛唐) 王維 「送別」(《王右丞集箋注》卷二)

(盛唐) 王維「送別」(『王右丞集箋注』卷三)
1 下馬飲君酒 2 問君所之 3 君言不得意 4 归鞍南山睡 5 但去復問 6 白雲盡時 7 別れにのぞんで馬から下り、君にはなむけの酒をすすめた。 私は問う「君はこれからどこに行くのか」と。 君は答える「世の中が思うようにならないから、 南山の片すみへ帰つて引きこもるのさ」と。 では行きたまえ、私はもう君に何も問うまい、 君が行く南山では白雲が尽くる時もなく湧きおこつてゐるだろう。
1 下馬飲君酒 2 問君所之 3 君言不得意 4 归鞍南山睡 5 但去復問 6 白雲盡時 7 別れにのぞんで馬から下り、君にはなむけの酒をすすめた。 私は問う「君はこれからどこに行くのか」と。 君は答える「世の中が思うようにならないから、 南山の片すみへ帰つて引きこもるのさ」と。 では行きたまえ、私はもう君に何も問うまい、 君が行く南山では白雲が尽くる時もなく湧きおこつてゐるだろう。
1 下馬飲君酒 2 問君所之 3 君言不得意 4 归鞍南山睡 5 但去復問 6 白雲盡時 7 別れにのぞんで馬から下り、君にはなむけの酒をすすめた。 私は問う「君はこれからどこに行くのか」と。 君は答える「世の中が思うようにならないから、 南山の片すみへ帰つて引きこもるのさ」と。 では行きたまえ、私はもう君に何も問うまい、 君が行く南山では白雲が尽くる時もなく湧きおこつてゐるだろう。
1 下馬飲君酒 2 問君所之 3 君言不得意 4 归鞍南山睡 5 但去復問 6 白雲盡時 7 別れにのぞんで馬から下り、君にはなむけの酒をすすめた。 私は問う「君はこれからどこに行くのか」と。 君は答える「世の中が思うようにならないから、 南山の片すみへ帰つて引きこもるのさ」と。 では行きたまえ、私はもう君に何も問うまい、 君が行く南山では白雲が尽くる時もなく湧きおこつてゐるだろう。

○何所之 之はある地点へ行くこと。  
どこへ行くのか。もつとも行くさき  
は作者にもわかつてゐるはずで、こ  
の質問は「どうするのか」、すなわ  
ち下の「帰臥」という答えを引き出  
すような気持を含む。○不得意思  
うようにならない。官吏登用試験に  
落第したか、官界での出世が順調に  
ゆかないことを意味する。○帰臥  
帰つたきり引きこもる。隠棲する。  
○南山 終南山のこと。長安の南に  
ある山。○睡 はずれのあたり。片  
すみ。○但去莫復間 但は下の字を  
強調する言葉。この一句には昔から  
三通りの解釈がある。これ以上君に  
たずねることはしまいとするもの、  
世俗のことなど問題にするなどとる  
もの、および全体を「君」の言葉と  
解して、作者に向かい、もう何もた  
ずねずに帰つてくれと言つたとする  
ものである。いまは第一の解釈をと  
つておく。○白雲 王維の詩では山  
中の生活を象徴するものとして、し  
ばしば使われる。たとえば「悠然た  
り遠山の暮、独り白雲に向かつて帰  
る」(朝川に帰る作)。

つまり、5句目の「問」の意味および5・6句目を誰の言葉と取るかで、詩の解釈が変わるのである。先に挙げた例示では、第一の解釈を基に訓説・翻訳した。第二の解釈では、第一の解釈と同様に、5・6句目は送る側である視点人物による「君」への言葉であるが、「問」の主語や意味が異なるため、訓説はそのままに次のように訳すことになる。

5 では行きたまえ、君はもう俗世間のことなど問題にしてはならぬ。

6 君が行く南山では白雲が尽きる時もなく湧きおこつてているだろう。

また、第三の解釈では、3句目から6句目までが「君」の言葉となるため、言葉の終わりに付す「と」が4句目ではなく6句目の末に来ることになり、訳もまたそれに合わせて、

3 君は答える「世の中が思うようにならないから、  
4 南山の片すみへ帰つて引きこもるのさ。」

さあ君は俗世間へと戻つて行つてくれ、もう私に何も問うてくれるな。

6 私の行く南山では白雲が尽きる時もなく湧きおこつてているのだから」と。

となる。但し、視点人物（詩の作者であることが多く、「送別」もそれに該当する）が自らの思いを表明せずに詩が終わることはあまりないため、第三の解釈が採られることは少ない。

また、前野氏も述べているが、「白雲」は「山中の生活」、即ち隠逸の象徴であり、これは六朝の齊・梁の頃の隠者である陶弘

景の詩に「山中何所有、嶺上多白雲（山中何の有る所ぞ、嶺上白雲多し）」とあるのに拠る（この詩については後述する）。そして、王維「送別」の6句目「白雲無盡時（白雲尽くる時無からん）」は、山中における情景描写でありながら、同時に隠逸を求める心情の比喩でもあった。この思いは帰隠する「君」だけでなく、「君」を送った作者の心にも湧きおこつてているのである。こうして全体の文脈を見たり、そして、別の作品と併読したりする」とで、「送別」は読み解くことが可能になるのである。

## 二、詩の主題を考える——送別と隱遁

王維「送別」の主題は「送別」であり、また、「隱遁」である。まず、王維には他にも送別詩があり、例えば、王維「送元二使安西（元二の安西に使ひするを送る）」などは、多くの教科書に採用された代表的な送別詩である。かかる同一作者の主題を同じくする名作を取りあげて比較するのも読解を深める手段である。

### (E) 同じ作者の同じ主題の作品をあわせて読み、比較する

王維「送元二使安西」は、使者の任を帯びて安西（今の新疆の庫車、唐代に安西都護府が置かれ、西域の守護を担つた）に旅立つ元二（元が姓、二は排行で二番目ということ）という友人に送つた詩である。渭城曲・陽關曲・陽關三疊など「樂府」としての別名があり、後世、別れの宴で歌われたといふ。「渭城」は長安の渭水を挟んだ向かい側の町咸陽の別名であり、西北方面に旅立つ人をここまで見送る風習があつた。「陽闕」は敦煌の西南にある関所のことで、古來西域との境界に在つて重要視された。

## (盛唐) 王維「送元二使安西」(『王右丞集箋注』卷十四)

1 潘城朝雨輕塵	渭城の朝雨、輕塵を裏し、
2 客舍青青柳色新	客舍青青、柳色新たなり。
3 勸君更盡一杯酒	君に勧む、更に尽くせ、一杯の酒、
4 西出陽關無故人	西のかた陽關を出づれば故人無からん。

1 潘城の朝の雨は細かな土ぼこりをしつとりと濡らし、  
宿の柳が青々と鮮やかな色合いになつた。  
2 さあ君もう一杯酒を飲みたまえ、  
3 西へ行つて陽關を出てしまえば一緒に酒を酌み交わす友はないのだから。

石川忠久氏はこの詩を次のように評している。

前半二句は、すがすがしい雨上がりの春の朝の情景。昨夜、長安から元二を送つてこの渭城の町へやつて来て、別れの宴を催して、今朝はいよいよお別れ。宿屋の前の柳の芽は雨に洗われて目にしめるように青々としている。中国では昔から別れの場面に柳がつきものだが、ここでも印象的に使われている。秋の夕暮れのさびしい雰囲気も別れにふさわしいのだが、この詩は「朝雨」と逆にいつた趣向であり、後半の送別の情を際立たせている。

後半二句。昨夜は遠くへ旅立つ元二と心ゆくまで酒を飲んだ。だが、いよいよ出発の今となれば、また別れのさびしさがこみ上げてくる。「更に尽くせ一杯の酒」この句の「更」

の字が非常によく効いている。「もう一杯」の重みが迫つて、尽きぬ名残りが朝の情景の中に余韻となつてただよう。

王維の「送別」と「送元二使安西」を「友人への送別」という同一主題の作として読み比べたとき、「送別」には所謂「別れのさびしさ」や「尽きぬ名残り」という悲哀の要素が薄いこと、却つて「君」を隱棲の地である終南山に送り出そうという強い意志があることが判る。これは、自ら終南山に帰隱せんとする「君」と、安西に使者として行かねばならない「元二」という別れゆく相手の事情に拘るからであろう。このように、同じ作者が同一の主題で詠んだとしても、各詩の内容や状況は異なるものである。その相違点を比較し分析することで、詩の表現の面白さや奥深さを理解できる上、作者の思いや性格までも見えてくるのである。ただ、吉川幸次郎氏に「やさしい、こまやかな神経のもちぬき」と評される王維が「送別」において、「君」にここまで強い意志を示したのは、そうした送別する相手の事情だけが原因だろうか。前野直彬氏は先に挙げた『唐詩選(上)』において、王維「送別」を次のように紹介している。

旅立つ友へおくる、はなむけの詩である。友人の名はわからない。作者の親友であつた詩人孟浩然に「歳暮、南山へ帰る」という詩があるので、この友人は彼のこととする説もあるが、確実ではない。また作者の別荘も南山のほとりにあるから、この詩全体が架空の対話であつて、送るもの送られるもの、ともに作者の分身であろうと見る説もある。

つまり、王維「送別」は帰隱する友人に詠んだ詩とするか、自

志を向けられた「君」は王維自身ということになる。

(盛唐) 王維 「送孟六歸襄陽」(『王右丞集箋注』卷十五)

1 杜門不欲出	1 門を杜ざして出づるを欲せず、
2 久與世情疎	2 久しく世情と疎なり。
3 以此爲長策	3 以此を以て長策と爲せば、
4 勸君歸舊廬	4 君に勧めて旧廬に帰らしむ。
5 醉歌舞田舍酒	5 酔ひて歌ふ田舎の酒、
6 笑讀古人書	6 笑ひて読む古人の書。
7 好是一生事	7 好しは一生の事、
8 無勞獻子虛	8 労する無かれ子虚を獻ずるを。

この詩と比べると、同じく隱遁する友人を送る詩である「送別」の「但去莫復問（但だ去れ、復た問ふこと莫し）」は、激励とともに些か厳しすぎる表現と言えよう。しかし、前野氏が云うもう一つの説のように、「送別」が自らを送る詩とすれば、その強い意

### 三、詩の連関と主題の広がり

らを送る詩とするかで分かれるという。小川環樹氏等による『王維詩集』も、「送別」について「この詩は実は心境を語るために自問自答した架空の送別詩であるかもしだ」と解説する。因みに、ここに挙げられた孟浩然（六八九～七四〇）は、王維より十歳年上の親しい友人でもあった。王維と同じく盛唐の自然詩人として名高く、後に「王孟」と並び称された。しかし、孟浩然は科舉に落第し、更には、縁故による官職も得られなかつたため、結局、故郷の襄陽に帰郷することを決めた。その別れの際、王維は「送孟六歸襄陽（孟六の襄陽に帰るを送る）」といふ送別詩を孟浩然に寄せ、孟浩然も王維に「留別王侍御維（王侍御維に留別す）」といふ留別詩（旅立つ人があとに残る人に寄せる詩）を贈つたと言われる。この「五言律詩」の送別詩が教科書に採られたことはないが、王維と孟浩然の交遊の一端が窺える作でもあり、また、帰郷する友人を送別するという同一主題の作であるため、ひとまず取り上げて比較したい。

王維は1・2句目において、距離においても時間においても俗世間から遠く長く離れることが隠遁であるとし、3・4句目でそれを孟浩然に「長策」として勧める。更に、5・6句目で酒と読書に耽る自由で安樂な隠遁生活を具体的に描写し、それを「好是一生事（好しは一生の事）」と評し、権力者に作品を献じて認めてもらつて官職を得ようとする愚を犯さないでほしいと祈念して結ぶ。王維は、孟浩然の故郷に帰つて隠棲するという選択に、深い共感と賞賛の意を表明したのであり、失意の孟浩然を慰め、激励せんとした思いが窺える。

この詩と比べると、同じく隠遁する友人を送る詩である「送別」

の「但去莫復問（但だ去れ、復た問ふこと莫し）」は、激励とともに些か厳しすぎる表現と言えよう。しかし、前野氏が云うもう一つの説のように、「送別」が自らを送る詩とすれば、その強い意

ところで、以前、拙稿において李白「山中問答」の読解を行つた際、(D)詩の「典拠」を読み、読解に深みを持たせるという方法を紹介したが、それは王維「送別」でも有効である。「送別」の主な典拠の一つは、第一章で言及した陶弘景(四五二～五三六)の詩「詔問山中何所有、賦詩以答(詔して「山中何の有る所ぞ」と問はれ、詩を賦して以て答ふ)」である。

(六朝梁) 陶弘景「詔問山中何所有、賦詩以答」  
(『古詩源』卷二十三)

1 山 中 何 所 有	山 中 何 の 有 る 所 ぞ、
2 嶺 上 多 白 雲	嶺 上 白 雲 多 し、
3 只 可 自 怡 悅	只 可 自 怡 悅 す べ き の み、
4 不 堪 持 寄 君	不 堪 持 寄 君 に 寄 す べ き へ ず。

「山の中に何があるのか」との下問があり、「高い嶺に白雲がたくさんございます。それはただわたしが見て楽しむことができるだけ、ご持参して宮中の御主君にお届けする」とは叶いません」とお答えした。

陶弘景は、世俗を離れて建康の東南にある句容の茅山に隱棲し、齊の高帝(蕭道成)の出仕要請も断つていた。そこで、高帝は陶弘景に山中の楽しみを問い合わせ、陶弘景はそれを「白雲」であると答えた。この「白雲」は、俗界の人には何の価値もないが、自分にはこの上なく楽しいもので、俗界には持つて行くことは出来ない

ものであるという。王維の「送別」の6句目に見える「白雲」はこの思想を継承しており、日加田誠氏は「この詩(陶弘景「詔問山中何所有、賦詩以答」)から奪胎して来たものかとも考えられるが、これ(王維「送別」)は更に淡白であり妙味がある」と評した。また、もう一つの重要な典拠として「古今隱逸詩人の宗」と称えられた東晋の陶淵明(三六五～四二七)の「飲酒二十首」其五が挙げられる。この詩は陶淵明の代表作として名高く、夏目漱石の『草枕』の冒頭に引用されたことでも有名であり、幾つかの教科書にも採用されている。そして、この「飲酒二十首」其五が「送別」を「自らを送る詩」とする根拠の一つになるのである。

陶淵明は山中に隠れ棲むのではなく、俗世間に接する「人境」に廬を構えた。その環境で何故そのように隠逸の境地を持つのかと問われ、「心」が俗事から遠ざかると、「地」、即ち住む場所、取り巻く環境も自ずと辺境同然の静寂なものとなると説いた。心の在り方が環境に作用するというのである。

但し、松枝茂夫・和田武司両氏の『陶淵明全集(上)』がこの3句目の「問君(君に問ふ)」を「君は作者を指す。自問自答である」と解説するように、これは実際の問答ではなく、自分の思ひを表明するための様式である。4句目に云う「心」と「地」の様子は5～8句目に詳しく描写され、かかる自然と精神が一体化した中にこそ言葉では説明できない「真意」が有ると詠まれる。松浦友久氏は、この「真意」について次のように評した。

この詩が淵明の代表作となりえたのは、かれが求めつけた真実の意境——精神の真実なる在りかた——が、輪郭はおぼろげながら、確かにここに提示されていると感じられるからであろう。作者は「此の中に真意有り」といしながら、「弁ぜんと欲して已に言を忘る」と結んでいる。言葉によつて弁

## (東晋)陶淵明「飲酒二十首」其五(『陶淵明集』卷三)

結廬在人境  
而無車馬喧  
問君何能爾  
心遠地自偏  
採菊東籬下  
悠然見南山  
山氣日夕佳  
飛鳥相與還  
此中有真意  
欲辨已忘言  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100  
101  
102  
103  
104  
105  
106  
107  
108  
109  
110  
111  
112  
113  
114  
115  
116  
117  
118  
119  
120  
121  
122  
123  
124  
125  
126  
127  
128  
129  
130  
131  
132  
133  
134  
135  
136  
137  
138  
139  
140  
141  
142  
143  
144  
145  
146  
147  
148  
149  
150  
151  
152  
153  
154  
155  
156  
157  
158  
159  
160  
161  
162  
163  
164  
165  
166  
167  
168  
169  
170  
171  
172  
173  
174  
175  
176  
177  
178  
179  
180  
181  
182  
183  
184  
185  
186  
187  
188  
189  
190  
191  
192  
193  
194  
195  
196  
197  
198  
199  
200  
201  
202  
203  
204  
205  
206  
207  
208  
209  
210  
211  
212  
213  
214  
215  
216  
217  
218  
219  
220  
221  
222  
223  
224  
225  
226  
227  
228  
229  
230  
231  
232  
233  
234  
235  
236  
237  
238  
239  
240  
241  
242  
243  
244  
245  
246  
247  
248  
249  
250  
251  
252  
253  
254  
255  
256  
257  
258  
259  
260  
261  
262  
263  
264  
265  
266  
267  
268  
269  
270  
271  
272  
273  
274  
275  
276  
277  
278  
279  
280  
281  
282  
283  
284  
285  
286  
287  
288  
289  
290  
291  
292  
293  
294  
295  
296  
297  
298  
299  
300  
301  
302  
303  
304  
305  
306  
307  
308  
309  
310  
311  
312  
313  
314  
315  
316  
317  
318  
319  
320  
321  
322  
323  
324  
325  
326  
327  
328  
329  
330  
331  
332  
333  
334  
335  
336  
337  
338  
339  
340  
341  
342  
343  
344  
345  
346  
347  
348  
349  
350  
351  
352  
353  
354  
355  
356  
357  
358  
359  
360  
361  
362  
363  
364  
365  
366  
367  
368  
369  
370  
371  
372  
373  
374  
375  
376  
377  
378  
379  
380  
381  
382  
383  
384  
385  
386  
387  
388  
389  
390  
391  
392  
393  
394  
395  
396  
397  
398  
399  
400  
401  
402  
403  
404  
405  
406  
407  
408  
409  
410  
411  
412  
413  
414  
415  
416  
417  
418  
419  
420  
421  
422  
423  
424  
425  
426  
427  
428  
429  
430  
431  
432  
433  
434  
435  
436  
437  
438  
439  
440  
441  
442  
443  
444  
445  
446  
447  
448  
449  
450  
451  
452  
453  
454  
455  
456  
457  
458  
459  
460  
461  
462  
463  
464  
465  
466  
467  
468  
469  
470  
471  
472  
473  
474  
475  
476  
477  
478  
479  
480  
481  
482  
483  
484  
485  
486  
487  
488  
489  
490  
491  
492  
493  
494  
495  
496  
497  
498  
499  
500  
501  
502  
503  
504  
505  
506  
507  
508  
509  
510  
511  
512  
513  
514  
515  
516  
517  
518  
519  
520  
521  
522  
523  
524  
525  
526  
527  
528  
529  
530  
531  
532  
533  
534  
535  
536  
537  
538  
539  
540  
541  
542  
543  
544  
545  
546  
547  
548  
549  
550  
551  
552  
553  
554  
555  
556  
557  
558  
559  
5510  
5511  
5512  
5513  
5514  
5515  
5516  
5517  
5518  
5519  
5520  
5521  
5522  
5523  
5524  
5525  
5526  
5527  
5528  
5529  
55210  
55211  
55212  
55213  
55214  
55215  
55216  
55217  
55218  
55219  
55220  
55221  
55222  
55223  
55224  
55225  
55226  
55227  
55228  
55229  
55230  
55231  
55232  
55233  
55234  
55235  
55236  
55237  
55238  
55239  
55240  
55241  
55242  
55243  
55244  
55245  
55246  
55247  
55248  
55249  
55250  
55251  
55252  
55253  
55254  
55255  
55256  
55257  
55258  
55259  
55260  
55261  
55262  
55263  
55264  
55265  
55266  
55267  
55268  
55269  
55270  
55271  
55272  
55273  
55274  
55275  
55276  
55277  
55278  
55279  
55280  
55281  
55282  
55283  
55284  
55285  
55286  
55287  
55288  
55289  
55290  
55291  
55292  
55293  
55294  
55295  
55296  
55297  
55298  
55299  
552100  
552101  
552102  
552103  
552104  
552105  
552106  
552107  
552108  
552109  
552110  
552111  
552112  
552113  
552114  
552115  
552116  
552117  
552118  
552119  
552120  
552121  
552122  
552123  
552124  
552125  
552126  
552127  
552128  
552129  
552130  
552131  
552132  
552133  
552134  
552135  
552136  
552137  
552138  
552139  
552140  
552141  
552142  
552143  
552144  
552145  
552146  
552147  
552148  
552149  
552150  
552151  
552152  
552153  
552154  
552155  
552156  
552157  
552158  
552159  
552160  
552161  
552162  
552163  
552164  
552165  
552166  
552167  
552168  
552169  
552170  
552171  
552172  
552173  
552174  
552175  
552176  
552177  
552178  
552179  
552180  
552181  
552182  
552183  
552184  
552185  
552186  
552187  
552188  
552189  
552190  
552191  
552192  
552193  
552194  
552195  
552196  
552197  
552198  
552199  
552200  
552201  
552202  
552203  
552204  
552205  
552206  
552207  
552208  
552209  
552210  
552211  
552212  
552213  
552214  
552215  
552216  
552217  
552218  
552219  
552220  
552221  
552222  
552223  
552224  
552225  
552226  
552227  
552228  
552229  
5522230  
5522231  
5522232  
5522233  
5522234  
5522235  
5522236  
5522237  
5522238  
5522239  
55222310  
55222311  
55222312  
55222313  
55222314  
55222315  
55222316  
55222317  
55222318  
55222319  
55222320  
55222321  
55222322  
55222323  
55222324  
55222325  
55222326  
55222327  
55222328  
55222329  
55222330  
55222331  
55222332  
55222333  
55222334  
55222335  
55222336  
55222337  
55222338  
55222339  
55222340  
55222341  
55222342  
55222343  
55222344  
55222345  
55222346  
55222347  
55222348  
55222349  
55222350  
55222351  
55222352  
55222353  
55222354  
55222355  
55222356  
55222357  
55222358  
55222359  
55222360  
55222361  
55222362  
55222363  
55222364  
55222365  
55222366  
55222367  
55222368  
55222369  
55222370  
55222371  
55222372  
55222373  
55222374  
55222375  
55222376  
55222377  
55222378  
55222379  
55222380  
55222381  
55222382  
55222383  
55222384  
55222385  
55222386  
55222387  
55222388  
55222389  
55222390  
55222391  
55222392  
55222393  
55222394  
55222395  
55222396  
55222397  
55222398  
55222399  
552223100  
552223101  
552223102  
552223103  
552223104  
552223105  
552223106  
552223107  
552223108  
552223109  
552223110  
552223111  
552223112  
552223113  
552223114  
552223115  
552223116  
552223117  
552223118  
552223119  
552223120  
552223121  
552223122  
552223123  
552223124  
552223125  
552223126  
552223127  
552223128  
552223129  
552223130  
552223131  
552223132  
552223133  
552223134  
552223135  
552223136  
552223137  
552223138  
552223139  
552223140  
552223141  
552223142  
552223143  
552223144  
552223145  
552223146  
552223147  
552223148  
552223149  
552223150  
552223151  
552223152  
552223153  
552223154  
552223155  
552223156  
552223157  
552223158  
552223159  
552223160  
552223161  
552223162  
552223163  
552223164  
552223165  
552223166  
552223167  
552223168  
552223169  
552223170  
552223171  
552223172  
552223173  
552223174  
552223175  
552223176  
552223177  
552223178  
552223179  
552223180  
552223181  
552223182  
552223183  
552223184  
552223185  
552223186  
552223187  
552223188  
552223189  
552223190  
552223191  
552223192  
552223193  
552223194  
552223195  
552223196  
552223197  
552223198  
552223199  
552223200  
552223201  
552223202  
552223203  
552223204  
552223205  
552223206  
552223207  
552223208  
552223209  
552223210  
552223211  
552223212  
552223213  
552223214  
552223215  
552223216  
552223217  
552223218  
552223219  
552223220  
552223221  
552223222  
552223223  
552223224  
552223225  
552223226  
552223227  
552223228  
552223229  
552223230  
552223231  
552223232  
552223233  
552223234  
552223235  
552223236  
552223237  
552223238  
552223239  
552223240  
552223241  
552223242  
552223243  
552223244  
552223245  
552223246  
552223247  
552223248  
552223249  
552223250  
552223251  
552223252  
552223253  
552223254  
552223255  
552223256  
552223257  
552223258  
552223259  
552223260  
552223261  
552223262  
552223263  
552223264  
552223265  
552223266  
552223267  
552223268  
552223269  
552223270  
552223271  
552223272  
552223273  
552223274  
552223275  
552223276  
552223277  
552223278  
552223279  
552223280  
552223281  
552223282  
552223283  
552223284  
552223285  
552223286  
552223287  
552223288  
552223289  
552223290  
552223291  
552223292  
552223293  
552223294  
552223295  
552223296  
552223297  
552223298  
552223299  
552223300  
552223301  
552223302  
552223303  
552223304  
552223305  
552223306  
552223307  
552223308  
552223309  
552223310  
552223311  
552223312  
552223313  
552223314  
552223315  
552223316  
552223317  
552223318  
552223319  
552223320  
552223321  
552223322  
552223323  
552223324  
552223325  
552223326  
552223327  
552223328  
552223329  
552223330  
552223331  
552223332  
552223333  
552223334  
552223335  
552223336  
552223337  
552223338  
552223339  
552223340  
552223341  
552223342  
552223343  
552223344  
552223345  
552223346  
552223347  
552223348  
552223349  
552223350  
552223351  
552223352  
552223353  
552223354  
552223355  
552223356  
552223357  
552223358  
552223359  
552223360  
552223361  
552223362  
552223363  
552223364  
552223365  
552223366  
552223367  
552223368  
552223369  
552223370  
552223371  
552223372  
552223373  
552223374  
552223375  
552223376  
552223377  
552223378  
552223379  
552223380  
552223381  
552223382  
552223383  
552223384  
552223385  
552223386  
552223387  
552223388  
552223389  
552223390  
552223391  
552223392  
552223393  
552223394  
552223395  
552223396  
552223397  
552223398  
552223399  
552223400  
552223401  
552223402  
552223403  
552223404  
552223405  
552223406  
552223407  
552223408  
552223409  
552223410  
552223411  
552223412  
552223413  
552223414  
552223415  
552223416  
552223417  
552223418  
552223419  
552223420  
552223421  
552223422  
552223423  
552223424  
552223425  
552223426  
552223427  
552223428  
552223429  
552223430  
552223431  
552223432  
552223433  
552223434  
552223435  
552223436  
552223437  
552223438  
552223439  
552223440  
552223441  
552223442  
552223443  
552223444  
552223445  
552223446  
552223447  
552223448  
552223449  
552223450  
552223451  
552223452  
552223453  
552223454  
552223455  
552223456  
552223457  
552223458  
552223459  
552223460  
552223461  
552223462  
552223463  
552223464  
552223465  
552223466  
552223467  
552223468  
552223469  
552223470  
552223471  
552223472  
552223473  
552223474  
552223475  
552223476  
552223477  
552223478  
552223479  
552223480  
552223481  
552223482  
552223483  
552223484  
552223485  
552223486  
552223487  
552223488  
552223489  
552223490  
552223491  
552223492  
552223493  
552223494  
552223495  
552223496  
552223497  
552223498  
552223499  
552223500  
552223501  
552223502  
552223503  
552223504  
552223505  
552223506  
552223507  
552223508  
552223509  
552223510  
552223511  
552223512  
552223513  
552223514  
552223515  
552223516  
552223517  
552223518  
552223519  
552223520  
552223521  
552223522  
552223523  
552223524  
552223525  
552223526  
552223527  
552223528  
552223529  
552223530  
552223531  
552223532  
552223533  
552223534  
552223535  
552223536  
552223537  
552223538  
552223539  
552223540  
552223541  
552223542  
552223543  
552223544  
552223545  
552223546  
552223547  
552223548  
552223549  
552223550  
552223551  
552223552  
552223553  
552223554  
552223555  
552223556  
552223557  
552223558  
552223559  
552223560  
552223561  
552223562  
552223563  
552223564  
552223565  
552223566  
552223567  
552223568  
552223569  
552223570  
552223571  
552223572  
552223573  
552223574  
552223575  
552223576  
552223577  
552223578  
552223579  
552223580  
552223581  
552223582  
552223583  
552223584  
552223585  
552223586  
552223587  
552223588  
552223589  
552223590  
552223591  
552223592  
552223593  
552223594  
552223595  
552223596  
552223597  
552223598  
552223599  
552223600  
552223601  
552223602  
552223603  
552223604  
552223605  
552223606  
552223607  
552223608  
552223609  
552223610  
552223611  
552223612  
552223613  
552223614  
552223615  
552223616  
552223617  
552223618  
552223619  
552223620  
552223621  
552223622  
552223623  
552223624  
552223625  
552223626  
552223627  
552223628  
552223629  
552223630  
552223631  
552223632  
552223633  
552223634  
552223635  
552223636  
552223637  
552223638  
552223639  
552223640  
552223641  
552223642  
552223643  
552223644  
552223645  
552223646  
552223647  
552223648  
552223649  
552223650  
552223651  
552223652  
552223653  
552223654  
552223655  
552223656  
552223657  
552223658  
552223659  
552223660  
552223661  
552223662  
552223663  
552223664  
552223665  
552223666  
552223667  
552223668  
552223669  
552223670  
552223671  
552223672  
552223673  
552223674  
552223675  
552223676  
552223677  
552223678  
552223679  
552223680  
552223681  
552223682  
552223683  
552223684  
552223685  
552223686  
552223687  
552223688  
552223689  
552223690  
552223691  
552223692  
552223693  
552223694  
552223695  
552223696  
552223697  
552223698  
552223699  
552223700  
552223701  
552223

描写から、却つて一人であることを楽しんでいたことが窺える。そんな王維も時には山中で木こりと出会いて話すことがあった。古来、木こりや漁師は隠者の仲間である。そんな木こりとの語らいは、いつまでも終わらないほど楽しいものであったという。

(盛唐) 王維「終南別業」(『王右丞集箋注』巻二)

1 中歳頗好道  
2 晚家南山睡  
3 興來每獨往  
4 勝事空自知  
5 行到水窮處  
6 坐看雲起時  
7 偶然值林叟  
8 談笑無還期

中歳頗好道を好み、  
晩に家す南山の睡。  
興來たれば毎に独り往き、  
勝事空しく自ら知る。  
行きて水の窮まる処に到り、  
坐して雲の起ころる時を見る。  
偶然林叟に值ひ、  
談笑して還る期無し。

1 中年になつていささか仏道を好むようになり、  
晩年に南山の片すみに別荘を構えた。  
2 感興が湧くといつも一人でそこへ出かけているが、  
こここの自然の美しさはわたし一人が知るばかり。  
3 川の流れの源の処まで歩いたり、  
雲の湧きおこる時をじっと眺めたりする。  
4 時にはふと木こりのおじさんに出会い、  
そのまま楽しく語らつて帰る時間をおれることがある。

つまり、王維は、俗世間の喧嘩から離れた静寂な空間で、自然の美しさやその中で生きる賢人に対しながら、一人仏道を修めていたのであつた。

そして、この詩の2句目「晩家南山睡(晩に家す南山の睡)」、6句目「坐看雲起時(坐して雲の起ころる時を見る)」を見れば、「送別」の4句目「歸臥南山睡(南山の睡に帰臥せん)」、6句目「白雲無盡時(白雲尽くる時無からん)」と呼応していることが判る。松原氏は次のように論じている。

この詩(王維「終南別業」)は、隠遁を主題としている点で、帰隱を送別する「送別」詩と同じ意識の基盤の上にある。しかも注目すべきは、二つの具体的な点で「送別」詩と脈絡を通じていることである。

第一に、この詩の題が『国秀集』に「初至山中」とあることは、とりわけ重要である。この詩題に拠れば、この詩は、終南の別業に移り住んだばかりの時期の制作となるからである。「送別」詩が王維の自送の詩であると解釈するとき、「終南別業」詩との関連は最も明瞭になる。王維は「送別」詩によつて自分自身を、名利の価値に拘われる官人の世界から、南山の睡りなる絶対自由の世界に解き放つ。そしてこの「終南別業」詩は、王維が目指した絶対自由の世界を、実地に確認することを主題とする詩となる。こうして二篇の詩は、相い表裏する関係に置かれることになるであろう。

第二に、その表裏の関係を物語るかのよう、この二首には字句の相関を認める事ができる。すなわち「晩家南山睡」の句は、「送別」詩の「歸臥南山睡」と明らかに対応関係に置かれている。「南山睡」の三字を同じくするのは、

王維の詩中においてこの二篇だけである。しかも「送別」詩では、なほ期待の中に止まっていた「白雲無尽時」という白雲に象徴される絶対自由の境地は、「終南別業」詩では「坐看雲起時」の句と姿を変え、ここに目睹の光景となつて自分の世界の中に獲得されるのである。主題の共通性に加えて、このように字句上にも認められる相関は、單なる偶然の結果を超えて、制作に当たった作者の「意識の継続」を反映すると考えることが必要になるだろう。

このように、「隱遁」という主題とそれを象徴する字句の「南山睡」、「(白)雲」が「送別」と「終南別業」を繋ぐものであり、「送別」の「君」が後に如何に過ごしたのかが「終南別業」に描かれていくと言えよう。そして、「送別」の5・6句目「但去莫復問、白雲無盡時」(但だ去れ、復た問ふこと莫し、白雲、尽くる時無からん)といふ、他の王維の送別詩には見られない強い意志的な言葉が王維自身に向けられているとすれば、そこから彼の仏道に対する姿勢や、友人に細やかな優しさと配慮を示す一方で、些か潔癖で自分に厳しい性格が見えてくるのではないか。

#### 四、詩の後世への影響と新たなる表現への昇華

唐の名詩は後世に大きな影響を与えた。そして、後世の文人たちはその唐詩に感銘を受け、時にはそれを典拠としながら、新たな表現を模索した。そのようにして創作された作品をあわせて読むことで、どのような人物がどのように受容して創作したのかを知ることができる。

#### (G) 影響を受けた後世の作品をあわせて一緒に読む

王維「送別」も名作であるため、多くの文人に影響を及ぼしたが、ここでは日本における受容を幾つか紹介したい。

#### (日本江戸) 良寛「無題(仮称)」(『草堂詩集』天巻)

1	城 中 乞 食 了	城中乞食を了へ、
2	得 得 攜 襄 歸	得得として襄を携へて帰る。
3	歸 来 知 何 處	帰り來たるは知んぬ 何れの処ぞ、
4	家 在 白 雲 眠	家は白雲の睡に在り。

この詩は題の無い作品のため、本稿では仮に「無題」とした。平仄から「五言古詩」に分類される。作者の良寛(一七五八~一八三一)は江戸後期の曹洞宗の僧で、和歌や書、漢詩にも秀でており、そこで独自の境地を開いたと言われる。ここで取り上げた詩も、1・2句目に町中で托鉢を終えて歩いて帰る日常的な情景を描写した後、3句目に「歸來(帰り來たる)」という陶淵明「歸去來兮辭」を連想させる字句を用いながら、自分が帰るべき処はどうなのがと自問する。そして、4句目にて、帰る家は「白雲」の湧きおこる山の「睡」に在ると答えて結ぶ。典拠である王維「送別」と同様に、この「白雲」は情景描写であると同時に求道する心情の比喩でもあり、良寛は自らの身心の帰着する処が静寂

なる「白雲の睡」であると詠んだのであつた。

明治維新後の近代にも、次のような留別詩がある。

(日本近代) 夏目漱石 「無題 明治三十三年」(『漱石詩注』)

君病風流謝俗紛  
吾愚牢落失鴻羣  
磨輒未徹古人句  
嘔血始看才子文  
陌柳映衣征意動  
館燈照鬢客愁分  
詩成投筆蹣跚起  
此去西天多白雲

君病みて風流俗紛を謝し、  
吾愚にして牢落鴻群を失ふ。  
磨輒を磨きて未だ徹せず古人の句く、  
嘔血を嘔きて始めて看る才子の文。  
陌柳に映じて征意動き、  
館燈を照らして客愁分かつ。  
詩成り筆を投じて蹣跚として起てば、  
此の去西天白雲多し。

1 君は病を得てから俗塵を謝絶して風流に過ごしているが、わたしは愚かで群から逸れた鴻のように孤独な身となつた。2 敷き瓦を磨いても悟りには至らぬと寒山詩でも云われたが、血を吐くまで至つて君は才能あふれる文学を生み出し、それは皆に読まれるのだ。3 道端の柳の影が衣に映るとき旅行かんと我が心が動くが、宿の灯が鬢を照らせば見知らぬ地へ旅立つ愁いがわたしど君それぞれの胸に来ます。4 詩が完成して筆を投げ置きよろよろと立ち上がりれば、わたしが旅行く西方の空にたくさんの白雲が見えた。

作者は近代日本を代表する文豪である夏目漱石(一八六七—一九一六)であり、この詩は漱石が明治三十三年(一九〇〇)に英国留学に行く際、友人の正岡子規(一八六七—一九〇二)に寄せたものである。まず、1句目は子規の、2句目は漱石の現状を詠んで比較しており、3・4句目は1句目の子規の文学創作の様子を古人の寒山の詩と比較しながら描写する。漱石はその文学が読む人の心を打つものと予測し、彼を激励したのである。そして、5・6句目では、2句目で示唆されていた孤独に旅立つ漱石、そして、それを見送る子規の別れの描写となる。古来別れの象徴たる柳の影、煌々と鬢を照らす宿屋の灯が、英國留学への期待と不安、そして、何より離別の哀しみに揺れ動くそれぞれの心を投影しているのである。そして、7・8句目では、西域で手柄を立てんと筆を投げ置いた後漢の班超に倣いつゝ、漱石はよろよろと立ち上がる。彼の旅立つ先の西の彼方の空には「白雲」が湧きおこつていたという。

そして、この詩の8句目の「此去西天多白雲(此の去西天多し)」が王維「送別」の「但去莫復問、白雲無盡時(但たゞ去れ復た問ふこと莫し、白雲尽くる時無からん)」を意識して詠まれたことを吉川幸次郎氏が指摘しているが、その字句から見て、陶弘景詩の「嶺上多白雲(嶺上白雲多し)」も念頭にあつたであろう。詩の前半において子規が文学に命を捧げている現状を賛を込めて詠んでいること、そして、典拠である王維「送別」の「白雲」の表現に鑑みれば、この漱石詩の「白雲」は留学先にて見出せるかもしれない漱石自身の理想となるもの、この場合は生涯の学問や仕事を比喩しており、彼の期待する思いが絶えず湧きおこつていることが窺える。一方で、この留学は自ら望んで行く帰隱ではないため、そこに理想の世界が待つてゐるとは限らない。故に、留学前の今はそれこそ「白雲」のように見通しもつ

かず、つかみ所もないために、不安を抱いていたとも見なせる。これについては、7・8句目の「蹠跚」たる足取り、西方の空に見える「白雲」を如何に解釈するかで変わってくるだろう。また、厳密には王維「送別」が典拠であるとは断定し難いが、王維や良寛の詩の影響が窺える漱石の詩として次の詩がある。

(日本近代) 夏目漱石 「無題 十一月二十日夜」(『漱石詩注』)

1 真蹠寂莫杳難尋	眞蹠は寂莫として杳かに尋ね難く、
2 欲抱虛懷步古今	虚懷を抱きて古今に歩まんと欲す。
3 碧水碧山何有我	碧水碧山何ぞ我有らん、
4 蓋天蓋地是無心	蓋天蓋地是れ無心。
5 依稀暮色月離草	依稀たる暮色月は草を離れ、
6 錯落秋聲風在林	錯落したる秋声風は林に在り。
7 眼耳雙忘身亦失	眼耳双つながら忘れて身も亦た失ひ、
8 空中獨唱白雲吟	空中に独り唱ふ白雲の吟。

1 ほんとうの道とは物寂しく杳として求めがたいもの、  
2 故に虚心をもつて昔から今までその道を歩こうとしたのだ。  
3 澄み切った緑の山河には我欲など微塵もなく、  
4 世界を覆う天も地もただ無心である。  
5 おぼろなる夕暮れの景色に月は草の上から離れゆき、  
6 入り乱れる秋の気配に風は木々の間を駆ける。  
7 目も耳も感じられなくなり、身体の感覚も失われゆく中、  
8 私は空に向かつて一人白雲の詩を唱う。

1・2句目では「真蹠」(ほんとうの道)を求めて歩き続けた己の人生を振り返り、3・4句目ではそこで見出した境地を詠む。それは澄み切った碧い山河と世界を覆う天地それら自然(天)の我欲や私心を取り去つた在り方、即ち「則天去私」であった。5・6句目は病に冒されたながらも夕暮れから夜への自然の移り変わりを何とか知覚せんとしていたのだろうか。そして、7・8句目において、病のために視覚・聴覚をはじめとする感覚が次第に薄れていく今この時、漱石は空に向かつて「白雲」の詩を歌うことでその「則天去私」の境地に至らんとする。彼は、最期まで歩みを止めなかつたのであつた。

吉川幸次郎氏がこの5・6句目について「この聯、すでに鬼気を感じる」とし、7・8句目を以て「十四字、二句の後の逝去の予言となつた。いわゆる詩の讖を成すものである」と述べる。この詩は大正五年(一九一六)十一月二十日夜に詠まれたもので、かの未完の作となつた「明暗」とともに漱石の絶筆である。漱石はこの詩を詠んだ翌々日(十一月二十二日)に倒れ、十二月九日に帰らぬ人となつた。

この漱石詩の8句目に見える「白雲吟(白雲の吟)」についても諸説があるが、ここでは、漱石詩の「白雲」が王維「送別」をはじめとする先人の詩の系譜の中で詠まれていることに着目したい。つまり、「白雲吟(白雲の吟)」とは、王維や良寛等の詩の如く、「白雲」、即ち自らの理想たる自由で静寂な境地をひたすらに求める詩歌のことであり、それを吟することでの漱石は「則天去私」の境地に自らを送らんとしたのである。そして、漱石が求め続けた「則天去私」は、特に彼の漢詩においては「白雲」に象徴されており、更にこの漱石最後の詩には、奇しくもこの世からあの世に自らを送る「予言(讖)」も含まれていたのであつた。

卷之二

「はじめに」でも述べたが、国語の漢文教育では①白文を②訓点に沿って③訓読（書き下し）し、④語句や語法を学んで読解し翻訳することで終わることが多いが、その読解において様々な工夫を行い、かつ、(E)～(G)などの別の作品もあわせて読むことによつて、より深い読解が可能となる。

(G) (F) (E) 同じ作者の同じ主題の作品をあわせて読み、比較する  
関連する作品をあわせて一緒に読む  
影響を受けた後世の作品をあわせて一緒に読む

今回、王維「送別」を教材とし、「はじめに」で挙げた(A)～(D)の方法を応用しながら、(E)～(G)の方法を行うことを考えたが、これらは他の漢詩教材にも応用できよう。

組み合わせることもまた手段の一つである。即ち、教材となつた漢詩文を(D)その典拠や(E)同じ主題の作、(F)関連作品など様々な角度から分析して読み解いた後に、(G)後世の文学作品に及ぼした影響、特に日本における受容とそこから生まれた作品も鑑賞すると、いつたことである。優れた漢詩文の持つ普遍的な主題や発想力を読み解くのみならず、かかる知識を積極的に受容し、かつ、自らの創作にも活かした日本の文人たちの柔軟性や表現力を改めて学ぶ機会にもなる。

注

- (1) 拙稿「漢詩教材研究—李白「山中問答」を読み解く—」(『金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要』第十号、二〇一八年)。

(2) 王維の詩については『王右丞集』(四部叢刊)および『王右丞集箋注』(上海古籍出版社、一九九八年)を参照。後者を底本とする。王維詩の訳注や解説は主に以下の書を参照。

  - ① 都留春雄『王維』(中国詩人選集6、岩波書店、一九五八年)
  - ② 小林太市郎・原田憲雄『王維』(漢詩大系10、集英社、一九六四年)

(3) 小川環樹・都留春雄・入谷仙介『王維詩集』(岩波文庫、一九七二年)

(4) 伊藤正文『王維—審美詩人』(中国の詩人—その詩と生涯5、集英社、一九八三年)

(5) 石川忠久『漢詩を読む』王維一〇〇選』(NHKライブラリー)、日本放送出版協会、二〇〇七年)

王維「送別」は『唐詩選』巻一所収。また、筑摩書房『古典B 漢文編 改訂版』に採用されている。

(4) 前野直彬『唐詩選(上)』(岩波文庫、一九六一年) 四二  
頁(四四頁)

(5) 王維「歸韜川作」(『王右丞集箋注』巻七)は、王維が終南山の別荘である韜川荘に帰るときの作である。

谷口疎鐘動 谷口疎鐘動きき、  
漁樵稍欲稀 漁樵(よきよ)稍く稀ならんと欲す。  
悠然遠山暮 悠然(ゆうぜん)たり遠山の暮、  
獨向白雲歸 獨り白雲に向ひて帰る。

- (6) 萎蔓弱難定  
楊花輕易飛  
東阜春草色  
惆悵掩柴扉
- 萎の蔓は弱くして定まりがち。  
楊の花は軽くして飛び易し。  
東阜の春草のいろは、  
惆悵のういを掩ふ。
- (7) 王維「送元二使安西」は、中学校教科書の学校図書『中学校国語3』、高等学校教科書では、教育出版、三省堂、桐原書店、筑摩書房、数研出版、第一学習社、大修館書店、東京書籍、明治書院等の『国語総合』の教科書に採用された定番教材である。教科書は「裏」を「浥」に作ることがあるが、同じ意味である。『樂府詩集』巻八十「渭城曲」では「浥」を作る。
- (8) 注(2)の⑤石川忠久『漢詩を読む 王維一〇〇選』一二〇頁  
一二二頁。
- (9) 吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』(岩波新書、一九五二年)一三五頁～一三九頁に王維の「送別」と「送元二使安西」を解説。この王維の性格についての記述は「送元二使安西」の解説において見える。また、『新唐詩選』の一一二頁～一二三頁には、王維「終南別業」も「入山寄城中故人」と題して解説している(注17参照)。
- (10) 注(2)の③小川環樹・都留春雄・入谷仙介『王維詩集』一五七頁～一五八頁。
- (11) 王維「送孟六歸襄陽」は元來『王右丞集』には未収録で、『文苑英華』巻二六八に収録されている。注(2)の④伊藤正文『王維－審美詩人』一六四頁～一七三頁および⑤石川忠久『漢詩を読む 王維一〇〇選』二〇一頁～二〇九頁に王維と孟浩然の交遊について言及されており、この別れ際の応酬の詩とともに解説されている。
- (六朝梁)陶弘景「詔問山中何所有、賦詩以答」は『太平廣記』巻一〇一「儒行」にも収録されている。また、(東晋)陶淵明「歸去來兮辭」(『陶淵明集』巻五)にも「雲無心而出岫、鳥倦飛而知還(雲は無心にして岫を出で、鳥は飛ぶに倦みて還るを知る)」とあり、隠棲した山の峰から雲が湧き出しているという。
- (12) 目加田誠『唐詩選』(新釈漢文大系19、明治書院、一九六四年)一八〇頁～一八一頁。
- (13) 藤原「飲酒二十首」其五は大修館書店『古典B 改訂版漢文編』および『精選 古典B』、三省堂『高等学校 古典漢文編 改定版』、明治書院『新 精選古典B 漢文編』等に採用されている。
- (14) 松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集(上)』(岩波文庫、一九九〇年)一〇八頁～一〇九頁。
- (15) 松浦友久『中国名詩集－美の歳月』(朝日文庫、一九九二年)四六六頁～四六九頁。
- (16) 松原朗「自送の詩－王維『送別』詩論考－」(『中国詩文論叢』第20集、中国詩文研究会、二〇〇一年)、後に同著『中國離別詩の成立』(研文出版、二〇〇三年)に収録。後者の著書から引用。
- (17) 王維「終南別業」は『國秀集』巻中において「初至山中」として収録されている。『河嶽英靈集』巻上、『文苑英華』巻五七〇、『唐文粹』巻十六下にも収録されており、そこでは「入山寄城中故人」と題する。
- (18) 良寛の詩は、①東郷豊治編著、鈴木虎雄・堀口大学校閲『良寛全集』上巻(東京創元社、一九五九年)および②入矢義高訳注『良寛詩集』(東洋文庫七五七、平凡社、一〇〇六年)、③内山知也・谷川敏朗・松本市壽編集『定本良寛全集』第一巻詩集(中央公論社、一〇〇六年)を参照。③を底本とした。

(19) 吉川幸次郎『漱石詩注』(岩波文庫、一〇〇一年) 一〇一  
頁一〇三頁。

(20) 「磨甄」の故事は夏目漱石『吾輩は猫である』第九章にも登場し、元々は唐の禪僧である南岳懷讓と馬祖道一の挿話で、『江西馬祖道一禪師語錄』や『正法眼藏』『古鏡』などに見える。寒山がこれを踏まえて詠んだのが、次の「詩三百三首」其九十七である〔寒山詩〕、『全唐詩』卷八〇六)。

蒸砂操作飯

渴渴始掘井  
用力磨礲甄

那堪將作鏡

佛說元平等

總有真如性

但自審思量

不用閑爭競

班超(三二九一〇二)は後漢の武将で、『漢書』を著した班固の弟である。西域に派遣され、西域の諸国を服属させて西域都護となり、定遠侯に封ぜられた。「投筆」の故事は、『後漢書』卷四十七の「班超伝」に見える。

班超字仲升、扶風平陵人、徐令彪之少子也。爲人有大志、不修細節。然内孝謹、居家常執勤苦、不恥勞辱。有口辯、而涉獵書傳。永平五年、兄固被召詣校書郎、超與母隨至洛陽。家貧、常爲官傭書以供養。久勞苦、嘗輒棄投筆歎曰「大丈夫無它志略、猶當效傅介子・張騫立功異域、以取封侯。安能久事筆研間乎。」左右皆笑之。超曰「小子安知壯士志哉。」

班超字仲升、扶風平陵の人、徐令彪の少子なり。爲人大志有り、細節を修めず。然るに内に孝謹にして、家に

居りては常に勤苦を執り、労辱を恥ぢず。口弁有りて、書伝を涉獵す。永平五年、兄の固召されて校書郎に詣り、超と母とは随ひて洛陽に至る。家貧しくして、常に官の為に傭書して以て供養す。久しく労苦し、嘗て業を輟め筆を投じて歎じて曰はく「大丈夫は它的志略無くんば、猶ほ當に傅介子・張騫に效ひて功を異域に立て、以て封侯を取るべし。安んぞ能く久しう筆研の間を事とせんや」と。左右皆之を笑ふ。超曰はく「小子安んぞ壯士の志を知らんや」と。

(22)

注(19)の吉川幸次郎『漱石詩注』の「多白雲」の解説に「唐詩選」の王維の詩に、「南山に帰臥する友人を送つて、「但たれ復た道うなかれ、南山白雲多し」。白雲は清潔さの象徴。前詩の「江山滿目悉吾師」が、この詩ではこの三字となつたとも見られるが、単に自然の白雲のみでなく、西洋の人文にうずまく白雲をも含意するかも知れない」とある。

(23)(24)注(19)の吉川幸次郎『漱石詩注』三〇一頁～三〇二頁。

夏目漱石の漢詩と「白雲」については先行研究も幾つかあ

り、④の論述を基に列挙する。

① 渡部昇一「白雲郷と色相世界——夏目漱石の漢詩論——」

〔比較文學〕11巻、日本比較文学会、一九六八年)。

後に同著『漱石と漢詩』(英潮社出版、一九七四年)

に収録。

② 佐古純一郎「漱石の漢詩文」(三好行雄等編、講座夏目漱石第2巻『漱石の作品(上)』、有斐閣、一九八一年)。

③ 祝振媛「漱石の漢詩文——〈白雲郷〉を中心にして」(国文学解釈と鑑賞)66(3)、至文堂、一九〇一年)

④ 藤田智章「漱石詩における「白雲」のイメージについて

(25) て」(『二松 大学院紀要』第19集、二松學舎大学大学院文学研究科、二〇〇五年)

漱石には良寛詩を意識した「無題三首 十月二十二日」其二があり、「ここから漱石は良寛詩も知っていたことが判る。注(19)の吉川幸次郎『漱石詩注』二九三頁～二九四頁。

元は東家子 元是れ東家の子、  
西隣乞食歸 西隣乞食して帰る。  
歸來何所見 帰り来たりて 何の見る所ぞ、  
舊宅雨霏霏 旧宅雨霏霏たり。